脳梗塞を発症し左片麻痺を呈した症例の自宅復帰に向けて－自宅復帰への不安が強い妻への支援－

公益財団法人　脳血管研究所　美原記念病院

井上美鈴

Key Word：家族支援　自宅復帰　不安

【はじめに】

今回，脳梗塞による左片麻痺，高次脳機能障害を呈し，自宅復帰を希望していた症例を担当した．妻は自宅生活に対する不安を抱いていたが，段階的に不安を抽出し，継続して関わることで不安が軽減し，自宅復帰が可能となったため以下に報告する．

【事例紹介】

70 歳代男性．Y 月 Z 日，脳梗塞の診断で A 病院へ入院．Z+24 日 B 病院へ転院するが脳梗塞再発があり，Z+92 日家族希望で当院回復期リハビリ病棟へ転院．病前は ADL 自立しており，オートレース観戦が趣味だった．妻，長男と 3 人暮らし．妻は糖尿病でインスリン投与中．長男は精神疾患の疑いがあり無職であるが，ADL は自立．症例の希望は「歩いて家に帰りたい」である．

【作業療法評価】

随意性（左）Br.stageⅣ-Ⅳ-ⅣMMSE25/30 点 FIM70/126 点（運動 49 点，認知 21 点）歩行平行棒内 SLB 使用し監視～軽介助 車椅子駆動左側の壁に接触する場面多い トイレ動作移乗・立位保持監視～軽介助．下衣操作全介助．尿便意は曖昧病棟生活単独行動があり低床ベッド使用．ナースコールの使用は困難妻の心境退院後の生活が予測できないため漠然とした強い不安があった．症例は自宅へ帰りたいという希望があったため，自宅へ帰してやりたいという気持ちがあった．

【目標】

歩行ベースで入浴以外の ADL 監視．妻が自宅での生活をイメージでき，介護保険サービス等を利用し自宅復帰できる．

【問題点】

妻は退院後の生活がイメージできず自宅復帰に対して漠然とした強い不安がある．

【妻へのアプローチ】

①OT 訓練場面の見学　②自宅生活を想定した 1 日のスケジュール表を供覧　③ケアマネージャーとの連携　④家族指導

【介入経過】

Z+124 日，妻が OT 訓練場面見学をすることで症例の動作能力を把握し，スケジュール表を供覧したことで，自宅生活に対するイメージがつき，妻は転帰先を自宅とした．これにより，妻の不安は自宅生活から，自宅退院に向けて何をしていくべきかわかないという不安へシフトした．そのため，再度面談を行ない，介護保険サービス内容の検討や介助指導していくことを確認した．Z+142～151 日，ケアマネージャーと連携，家族指導の実施により，退院後の具体的なサービスの利用や自宅環境に合わせた介助方法を指導した．その結果，サービスや介助方法に対する妻の不安は軽減した．

【最終評価】

随意性 Br.stageⅤ-Ⅴ-ⅣMMSE27/30 点 FIM84/126 点（運動 57 点，認知 27 点）歩行 4 点杖と SLB 使用し監視～軽介助．狭い場所では左側に接触する場面あり トイレ 4 点杖，SLB 使用し一連の動作監視．妻の介助でふらつきなく実施可能．尿便意の曖昧さは残存病棟生活単独行動なし．食堂でお茶を飲んだり Ns と歩行練習をしたりしていた．ナースコール使用の困難さは残存．

【考察】

妻は転帰先決定に難渋していた．そのため，段階的に妻の不安を抽出しアプローチを行った．まず OT 場面の見学により症例の動作能力を理解してもらい，スケジュール表を供覧することで，具体的な生活をイメージしてもらった．OT が退院後の生活を具体化し，一緒に確認することで，妻は自宅での生活がイメージでき，自宅復帰を選択できたのではないかと考える．亀井は，他職種との連携を密に取りながら，医療管理や介護保険制度などを含む広い視野で支援していく必要がある[1)]と述べている．今回，ケアマネージャーとの連携を密にし，問題点や目標について情報共有できたことで，サービスや改修に対する妻の不安軽減に繋がったと考える．また，連携を図ることにより，症例の生活のみならず妻の不安に対してもシームレスな支援が可能になると考える．

【参考文献】

1）亀井祐子：片麻痺・高次脳機能障害を呈した症例の自宅退院に向けたアプローチ－環境設定・家族指導を中心として－，長野県作業療法士会学術誌，長野県作業療法士会，2014，32，18－20